

ヤナギラン *Chamaenerion angustifolium* (L.) Scop.

【選定理由】

温帯性の植物で、分布域の南限にあたる。愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。茎は直立し、分枝せず、高さ1~1.5mになる。葉は多数互生し、無柄か短い柄があり、葉身は長披針形、長さ5~20cm、幅1~3cm、先端は鋭頭、辺縁はほぼ全縁、裏面は粉白色をおびる。花期は6~8月、茎の先端に長さ10~45cmの総状花序をつくり、多数の花をつける。花は紅紫色、花弁は4枚で倒卵形、長さ1.3~1.7cm、幅6~8mm、小花柄は長さ5~15mmである。果実は線形で、長さ5~8cm、熟すと裂開し、種子は長さ約1mm、長い白毛がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根(茶臼山, 鳥居喜一 19020, 1952-9-20, HNSM)と設楽西部(段嶺村段戸山, 鳥居喜一 2054, 1952-8-2, HNSM)で採集された標本がある。現在も豊根(萩太郎山の野草園)で見られるが、これは人為的に播種されたものである。

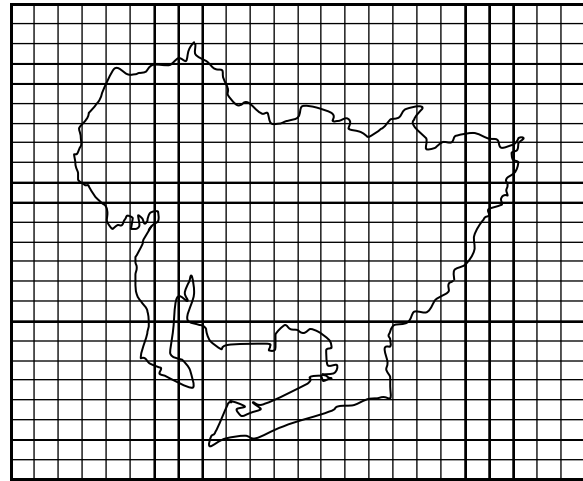
【国内の分布】

北海道、本州(中部地方以北)に生育する。長野県まで行けば、普通に見られる植物である。

【世界の分布】

ヨーロッパ、アジア、北アメリカに広く分布する。

関連地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

山地の林縁や草地に生育する。しばしば伐採跡地などに大きな群落を作る。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

もともと攪乱跡地などに生育する植物であり、遷移の進行によって絶滅したのではないかと思われる。種子は風散布なのでそのうちに再度出現する可能性はあるが、多量に播種されてしまったので、自然に分布を拡大してきたものがあったとしてもはや識別は不可能である。

【保全上の留意点】

現在萩太郎山にあるものは生物多様性という観点からは保全の対象とならず、むしろ除去が望ましい。自然環境下への播種・植栽は、その場所に生育している他の植物に悪影響を与えるだけでなく、将来の分布自然拡大による生物多様性増加の可能性も奪ってしまう。このような付け加えは、善意から出たものであっても、自然に対する大きな脅威となる行為であることを忘れてはならない。

【特記事項】

アカバナ属 *Epilobium* として扱われることも多い。

【関連文献】

保草本 p.38、平草本 p.266、SOS旧版 p.66。